

「教区教化伝道」10月号

今年はコロナに始まり、不安な日々が続き、あれよあれよという間にもう一年が過ぎようとしています。そんな中で一つわかったことがありました。「世のいのり」心に入れて念仏せよという親鸞聖人の言葉です。コロナの不気味さがテレビで連日騒がれるようになった頃、世界中の人がこの騒ぎの終息を祈りました。それは地球規模で先進国・後進国と呼ばれる国々も、敵対関係にある国々も、みんな同様に同じことを願い、人間の非力さを思い知らされた一瞬でもありました。私は遠くの友達と電話で来年生きてまた会おうねなどと笑って電話を切りましたが、高齢者の自分にはまんざら冗談でもなく、親鸞聖人の生きておられた頃の別れの挨拶はこれが普通だったのかと背中がヒヤリとしました。戦争を体験していない自分がこれほどの「世のいのり」を始めて、真剣に実感したような気がしました。

ところが続いて「正義の人」が現れました。最初に攻撃されたのは小学生でした。その子が登校途中にマスクのひもが切れて学校でもらうつもりでいたらいきなり殴りつけてきたという女性、お盆に帰省していた男性の実家の玄関にさっさと帰って下さいと張り紙をしていった人、こういった人が後を絶たずマスコミはこの正義の人達をコロナ警察と名付けました。ついにはマスクを着けない男性の乗った飛行機が途中で着陸するという事件までありました。これらの事件は誰もが経験したことのない不安な状況に人の心の負の部分を引き出されてしまったのでしょうか。

しかし、このコロナ警察と名付けられた人たちも、それと反対に何が何でもマスクをしないと頑張った男性も、共通しているのは「自分は正しい」と思っているということです。正しいと思えばこそ小学生を道でいきなり殴りつけたり、他人の家に張り紙をしたり、あるいは飛行機を止めてでも自分を主張することが出来るのでしょうか。この正義は全く相手の話に耳を傾け出ようとはせず、ただ敵か味方かと迫るばかりで自分を振り返る暇はなさそうです。

そこで、よくよく考えてみますと、この飛行機事件の一部始終を録画していた男性も、その映像を見ながらせめてルールだけは守れよ、と常識を唱えていたテレビ解説者もやはり自分の思う正義を訴えていることに変わりありません。さらに、街頭インタビューであればまずいでしょうと判じている若者同様、番組を見ている自分もまた、同じように自分は正しいと思い込んでいます。過激な正義を笑いながらただそこまでやらないようにと気をつけているだけ、自分はまあまあ正しかろうと信じて生きています。この大なり小なりの「自分は正しい」という思いから我々は一生逃れることはできません。

これを親鸞聖人は「善悪の凡夫」と名付けられました。また「惑染の凡夫」とも名付けられました。善か悪かと論争の続くこの状況は、世相が不安になったので強調されてきたのではなく、ただ人の本性が現れただけ、自分たちの本音はこんなものだからとかねてより親鸞聖人から言い当てられていた、ということではないのでしょうか。そんな親鸞聖人の声はもう現代の我々には遥か遠く、かすかに小さく、ほとんど聞こえなくなってきました。代わりに聞こえてくるのはますます増えてくる正義の人の声のみです。一体私たちは誰のどんな声に耳を傾けて、何を心に入れて生きているのか、自分は？と確かめるのは味方ではなく、情報によってでもなく自分自身でしかないように思います。